

今年もヘルとアルゼンチンから「海外移住者子弟研修生」がやってきました。



今年度の海外移住者子弟研修生 小橋川 ドラ ルーデス（左）さんと大城 アドリアン エルネストさん

研修生の父母や祖父母は海外への移民を決意し、希望と不安を胸に海を渡ったと思われます。彼らはなぜ海を渡ったのでしょうか？

沖縄大百科事典によると、移民の動機には出稼ぎ・一獲千金という経済的要因の他に地割制廃止による新土地制度（当時、村々で土地を共同所有していたのを、個人に所有権をもたせ、税を負担させた制度）の施行や徴兵忌避など社会的要因もあつたようです。

移民した人々は不慣れた土地で沖縄とは違った文化体験したことのない暑さや寒さの中、言葉が通じないながらも必死で農園や鉄道

敷設などの作業をして少しずつお金を稼いでいきました。

ある程度お金が貯まると沖縄に帰る人もいましたが、中にはその地に残り、落ち着く人もいました。彼らは親兄弟や家族を呼び寄せたり、同郷の移民者を世話して、彼らから遠い故郷の様子を聞いては懐かしみ、涙を流していたのでしょうか。

そうして仲間が増えてくると、彼らはそれぞれの国で沖縄県人会や西原町人会を作り、戦後の沖縄に戦災救援活動として物資を送ったり、学校建設費を寄付して遠く離れた所から沖縄そして西原町を見守り、支えてきました。

このように移民した人々の体験を記録し、後世に伝えるため町史では「移民編」発刊に向けて編集作業を続けています。

西原町は移民人数が県下でも上位に入っており（二千人以上）、それを移民関係資料、各国の西原町人会の名簿などをもとに整理しているところです。しかし、沖縄からはじめて移民を送

り出したのが百年ちかく前のことで、その間には沖縄戦や戦後のめざましい発展によって当時の面影はなくなり、その頃を知る人の記憶も薄らいできています。

しかし今日でも、国際交流の一環として研修生を受け入れたり、昨年八月に開催された沖縄県・ブラジル・アルゼンチン移住九十周年の記念式典関連事業に西原町からも訪問団を結成して参加しており、各国の県人会・町人会との交流は続いています。

今後は、各字の古老をはじめ町民の方々から聞き取り調査（戦前の住所や屋号）をする予定なのでご協力よろしく願います。

また、みなさんからの情報もお待ちしています。



アルゼンチン移住90周年記念式典時のお別れパーティー